十八日
山竹亭納涼

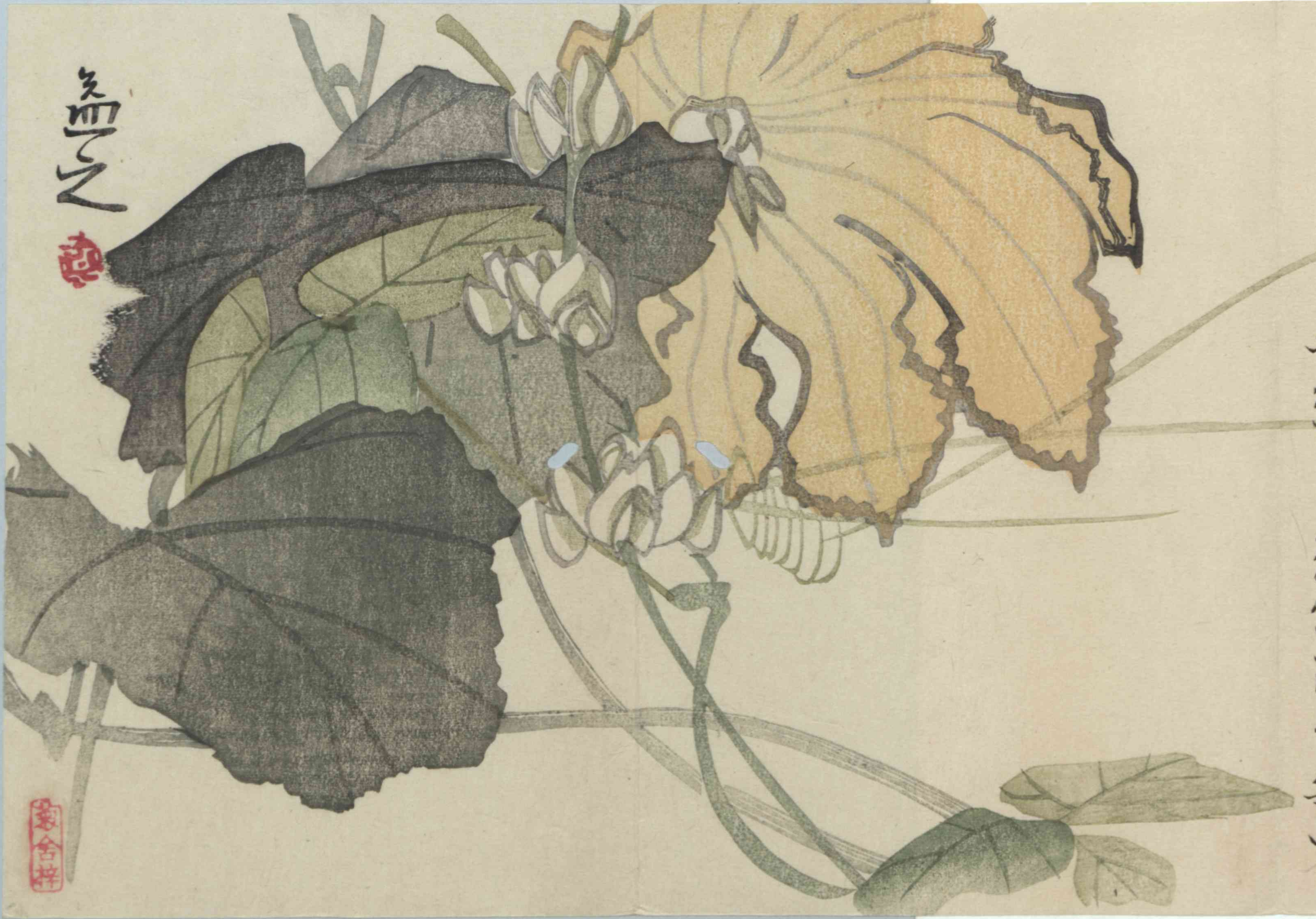
今出る月よりもすゞし暮の雲　江八幡 丁盈
何處ともなく田の水澄て風薫　伊丹 上七良
暮の月しづまる草も露おきて　何紅
人にけふなきも狩るすゞみ　白東
夕月夜深山草にも花の香よ　女 蓮桁

六四日
東居の留主の亭にて茶話の二篇を撰乃集りて聲書に

きて揺よなかぬ稲の水鶏に春に
なつの川草木もうつる夕かれ　出羽 山居
暮草の露の夜に花咲より　フミコ 机山
むくら戸の露深く秋夜露に　二雀
因なく乃よ蓮池のにゆる草家ま　竹亭

六月三日
枯鳥の居先にそ旅し来球飲て

水打て露も草木の露に　河内 士龍
暮萩や秋のはかなる月の露　出羽 心水
夕立に遠ま乃露の子　有定
帷子や襟の付ゆく水浴　黄鵑
夕まちかもきて露の中る龍鷺に　枯鳥
他郷の人と旅にて旅ひをおもうして苦艱をわすれ
瓜畠や危なまき角あれ 蓋山竹にて　升六



うし 洗ひなや

8317